しかいないので購買力は低いです。

ビジョン2020を達成するには、国の成長率は20年 以上5%以上を維持しないといけない。マレーシアは 国策としてハラルを導入しています。観光もそうです。 誰でも来られる環境にすればいろいろな人が来ます。

マレーシアは日本の技術を導入してヤクルトを作 り、マレーシア人がインドネシア、中国、インドにヤ クルトを輸出しています。これは今、日本が学ばなけ ればいけないことです。日本が持っている匠の世界で す。なぜ日本人の寿命が長いのか。女性が87歳、男性が 82歳です。寿命が長いのは食事のためです。こうした 日本が持っている技術を、イスラムの国々にどんどん 輸出するべきです。

■ TPPへの参加で 守るべきものを守りつつ攻める態勢を

TPPの問題もあります。TPPというのは、互いの関 税をゼロにしましょうということです。要するに、守 るべきものは守って、攻める態勢に変えなければな らない。これが日本がマレーシアから学ぶべきことで す。マレーシアはAFTAなどがあって東南アジア全体 にマレーシア製品を輸出できるし、人が行ったり来た りすることもできます。

日本にはTPPがある。私に言わせると日本はTPPに 最初から入るべきです。日本全体を見れば、工業製品、 電気製品、自動車製品が日本の国を支えている企業で す。今、アメリカと韓国には経済協定があって、アメリ カに韓国の車が入るときにかかる税金はゼロです。で も日本は何の関係もないから、日本の車は10%税金が かかります。要するに競争力が低下します。

最後になりますが、マレーシアはこのように誰でも 来やすい環境です。実際にマレーシアがどうしている か、ぜひマレーシアに遊びに行ってください。

司会 アクマルさんには、これまでの東方政策で見落 とされていた面や、双方向で学び相互関係の中で向上 させるべき点についてお話をしていただきました。

次はJAMSの会員からの報告です。まずは吉村真子 さん、法政大学の教授で、マレーシア経済と日本とマ レーシアの経済関係、労働、移住労働、ジェンダーなど の諸問題について研究をなさっています。今日は日本 マレーシア関係から見たルックイースト政策という 観点からのお話をいただきます。

報告3

吉村 真子 法政大学



東方政策についてはマレーシアと日本の関係から 第1部で話させていただきましたが、その背景を考え たときに、「ルックウエスト」ではなくて「ルックイー スト」であるのはなぜかという点が重要です。アジア の先進工業国として日本がモデルとして求められた 背景には、同政策を提唱したマハティール首相(当時) が1970年代から日本の労働倫理や経営方式に注目し ていたことがあります。また実際に今までの30年、日本 への留学生・研修生約1万4千人がおもにマレーシア 政府のお金で日本に来ていることも大きなことです。

こうしたことを考えても、同政策は日本とマレーシ アの関係において非常に大きな役割を果たしてきた と思います。また経済面、政治面、社会面と考えた場合 に、この30年で両国をめぐる国際環境も大きく変わっ てきたことも指摘できます。東方政策にとって今後の 課題は何かについては今日の総合討論でも皆さま方 にご意見をいただきたいですが、今後の日本とマレー シアの関係における東方政策の課題と展望を議論す るのに、ちょうど今回の東方政策30周年は非常にいい タイミングではないかと思っています。

■ 日本とマレーシア双方にとっての重要性と 中国のプレゼンスの状況

東方政策について、マハティール首相が1980年代初 頭に提唱して日本と韓国から学ぼうとしたといった 同政策に関する概略と内容については第1部でも報 告したので省略させていただきます。「ルックウエス ト」ではなくて「ルックイースト」であることの要因と して、植民地としての歴史に加えて、当時の対外関係、 宗主国であるイギリスとマレーシアとの関係、そして 緊張関係にあったアメリカ合衆国とマレーシアとの 関係からアジアのモデルを求める背景となったこと も第1部で説明しました。

その際にデータをお見せしましたが、マレーシアに とって外国からの直接投資や貿易関係は、もはや日本 がマレーシアにとってナンバーワンとは限らない。他 方、日本にとってのマレーシアの重要性はどうかと考

えたときに(例えば第1部で具体的にデータをお見せしたように)、近年の近隣アジア諸国に対する日本の投資の国別のデータを見ると、中国に対する投資の増加がアジアの中で非常に目立っている。そして今後もさらに伸びていくことが見込まれる。

ASEANを考えたときにも、今後はマレーシア以外の国々に対する投資や貿易が増える傾向が指摘できます。例えば、一般的に日本企業の対東南アジア投資ではタイとマレーシアが並んで議論されることが多いですが、マレーシアの隣国タイで洪水のために日系企業に多大な影響が出て、タイからどのようにリスク分散をするかという議論をするときに、隣国マレーシアへの移転が選択肢として出てくるわけではありません。また日本企業が労働コストの安いところを投資先として検討する際に、東南アジアの新たな投資対象国として検討する際に、東南アジアの新たな投資対象国として検討する際に、東南アジアの新たな投資対象国として検討する際に、東南アジアの新たな投資対象国として検討する際に、東南アジアの新たな投資対象国として検討する際に、東南アジアの新たな投資対象国として検討する際に、東南アジアの新たな投資対象国として検討する際に、東南アジアの新たな投資対象国として検討する際に、東南アジアの新たな投資対象国として検討する際に、東南アジアの新たな投資対象国として検討するのにあり、ASEAN4の既存の工場をどこに移して再配置するかという議論ではベトナム、中国などが当然候補として挙がってくる対象となっているわけです。

山本課長の基調報告や先ほどのプレゼンテーションでもありましたように、対中貿易がマレーシアでも非常に増えて、マレーシアのリーマンショックからの回復に大きく役立ったと言えますが、日本にとっても中国との貿易はますます増加して大きな位置を占めるようになってきています。

■ アジアにおけるマレーシアを考えると 東方政策の重要性は増すのではないか

そうしたこの30年間の互いの状況も含めて、投資や交易といった経済面、とくに、そうしたグローバル化の中におけるアジア、もしくは日本と近隣アジア諸国ということを考えたときに、現在から振り返って、もしも東方政策がなかったら日本とマレーシアとの関係はどうであったかということも含めて、この30年間における東方政策の役割は非常に大きかったのではないかと思います。

そもそも、東方政策が打ち出された1980年代初めに 日本にとってマレーシアはどれだけ重要だったのだ ろうかと考えると、この30年間、マレーシア側が打ち 出した東方政策によって、日本側は「マレーシアは日 本をこれだけ重要だと考えてくれている」、そして「マ レーシアからのそうしたラブコールにできるだけ応 えていこう」という面も大きかったと思います。そう 考えると、中国の重要性の増加なども含めてアジアの 中でのマレーシアの重要性の相対的低下を考えたと きに、東方政策はますます重要な役割を果たすのでは ないか、もしくは果たすべきだというのが同政策の位 置づけの一つになるのではないかと考えております。

■ 東方政策で育成された人材は 日本企業では充分に活用されていないのでは

マレーシアから日本に留学、研修で来た東方政策の 留学生もしくは元留学生(卒業生)の方々にお話を聞 くと、日本に留学、研修したことから、日本とマレーシ アとの架け橋としての役割を担いたい、そうした形で の何か手助けをしたいという思いが強いわけです。け れども日本企業側は、日本に留学したマレーシア人に 対して、日本に留学して日本語ができる、日本のやり 方や日本社会の慣習をよく理解しているという見方 だけが強く、双方には大きなギャップが出てきます。

例えばマレーシアの日系企業では、「通訳として活躍してもらって助かっている」もしくは「日本文化を理解してくれる現地スタッフとして、それこそ申し訳ないけれどもお茶くみコピーとりからよくやってくれる」といったことになります。別に相互関係としては悪くない。ただし、マレーシア人スタッフが企業でさらに上に行こうとすると、日本にある日本企業なら、正社員や総合職といった条件はつくかもしれませんが、少なくとも道筋や可能性があるかもしれませんが、マレーシアの日系企業では、(昨日、今日のJAMS研究大会でも議論があったように)いわゆるガラスの天井があって企業のトップにはなれないことになる。

こうした状況で、結局この企業では自分は通訳でしかないのか、じゃあトップの会議に自分が参加できるかといったら、日本語ができて日本文化がわかっていても、そこには入れてもらえない。通訳としての役割しか期待されず、自分の意見や提案を求められるわけでもない。では自分の存在は何なのだろうかということで、結局、自分の能力をちゃんとカウントしてくれる、自分の能力を評価してくれる欧米企業に転職するというケースが非常に多いということがあります。

こうしたことを考えると、せっかくマレーシアと日本が協力し合って東方政策プログラムで人材育成を 進めても、その人材が十分に活かしきれていないとい う指摘もできると思います。

■ 日本企業の国際化・グローバル化への 対応の遅れが問題

今年の東方政策30周年にあたって、外務省とJAMS の協力の一つにもなりますが、JAMSの川端隆史さんがコーディネーターになって外務省から依頼が

来て、アジアにおける若者たちの交流を目的とした JENESYSプログラムで、マレーシアから日本にスタ ディ・ツアーとして、4月にはマレーシアの学生さん、 5月には東方政策プログラムの留学生と卒業生もし くは関係者が来て、そのプログラムの一部として日本 とマレーシアの関係についてレクチャーをしました。 そのときに4月のマレーシアの大学生と5月の東方 政策プログラムの卒業生とでは反応が違いました。

5月の東方政策プログラムの卒業生に対するレク チャーでは、これからグローバル化の中においてマ レーシアはどう日本との関係をつくっていくのかと いう議論を提起しました。例えば(午前中の第一部の 報告の際にもお話ししたように)、ベトナムでは労働 コストも安く、現地の労働者はそれなりに期待するだ けの働きをしてくれて、相対的にコストパフォーマン スがいいと日系企業が評価する。他方でマレーシア では労働コストも上がってきて、そのコストの分の期 待に現地従業員が応えられるかと日本企業が考える 可能性もある。グローバル化が進む中では競争も激化 し、今後、日本とマレーシアの関係においてもいろい ろな課題が出てくるということを話しました。

そうした説明をした際に、東方政策プログラム卒業 生から、日系企業はマレーシア人労働者を低く評価 し、理解しようとしないという反応があり、そうした 一人の卒業生が若い世代の後輩に「(我々の世代はそ うした無理解に苦い思いもしたが)今後の30年間がど うなるかはあなた方次第なのだ」とムラユ(マレー)語 で熱く語りかけるということがありました。

東方政策プログラムの卒業生の中には、日本留学後 にマレーシアの日系企業に勤めて自分の能力を十分 に評価されなかったという体験をした方も多く、自分 で起業して日本企業とのビジネスを求めても日本企 業は取引先は日系中心でほかの欧米企業に比べて閉 鎖的で、もどかしい思いをするケースも聞きました。 そういうことを考えたときに彼らの体験した思いに 対して私たちはどう応えるのかというときに、日本企 業の国際化・グローバル化に対する対応の遅れが非常 に大きいことも問題だろうと思います。

■ 東方政策の卒業生が両国で活用されていない 現状について検討すべき

今度はマレーシア社会に視点を移して考えてみた いのですが、そうした東方政策プログラムのもとで人 材育成のためにマレーシア人の留学生・研修生がマ レーシアから日本に送られて、国費をかけて勉強・研

修を行う。その後マレーシアに戻ったときに、マレー シア社会においてどれだけ活躍できる場が彼らにあ るのか。東方政策プログラムの留学生との議論で彼ら 自身から出てきたのが、マレーシアの官庁での登用が 積極的にあるのか、日本留学組から大臣になったとか 要職に就いたという話をあまり聞かないではないか といった指摘と問題提起でした。

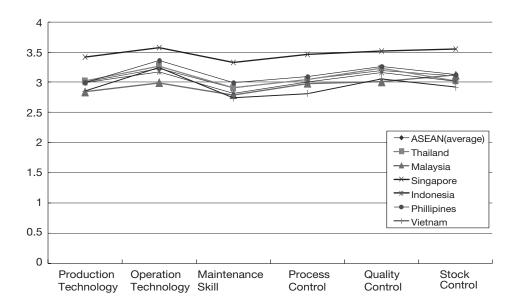
そういうことを考えたときに、マレーシア政府と日 本政府が協力して、実際にこれだけのコストと手間を かけて育成した人材が、日本企業でもマレーシア社会 でも十分に評価、活用されていないかもしれないとい うことは今一度考えて検討するべきだと思います。と くに日本との関係に対して非常に熱い思いを持って くれているマレーシアの若者が日系企業の中で活躍 できない、そして日本企業や日本人とのビジネス機会 が少ないということになると、非常に残念な状況だと 言えると思います。

■ 日本企業のアジア現地工場に関する調査 から見えるマレーシアへの期待

日本企業の東南アジア現地での現地工場や現地従 業員の評価についてのデータは、JETRO(日本貿易振 興機構)の2002年の調査データをもとにしていますの で、使っているデータとして少し前になりますが、今 回の報告と同じものを5月のJENESYSプログラムの 議論のときにも使いました。これは日系企業が自社の 工場の評価についてのアンケート調査をまとめたも のです。

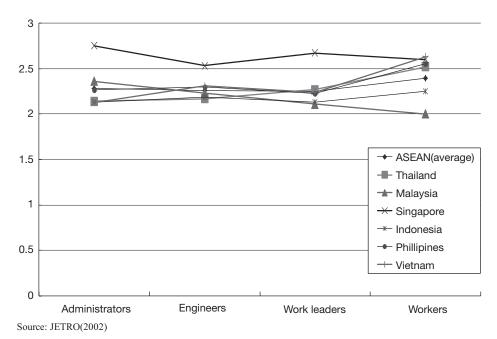
この調査では、その企業が自分たちの会社をどう見 るかという主観での評価で、チェックポイントなど共 通の指標を定めて評価したり、同じ人がほかの会社と 見比べて調査して回ったものでありませんので、当該 の会社のマネージングダイレクター(取締役)や工場 長といった日本人のスタッフが自分の支社・工場をど う評価するかというものです。その意味で、日本人ス タッフの現地工場に対する期待に対する満足度と考 えるといいと思います。

この国別の評価を示したのが資料1のグラフで、シ ンガポールの評価が高いことはある程度納得がいく かと思います。その会社での全般についての評価は、 生産技術やオペレーションの技術、メンテナンスの スキル、プロセスのコントロール、クオリティコント ロール、在庫管理といった項目から見ていて、シンガ ポールが上にくるのはある程度仕方ないなと思いま す。先ほど指摘しましたように従業員に関する評価を



Source: JETRO(2002)

日系企業による自分たちの企業の評価

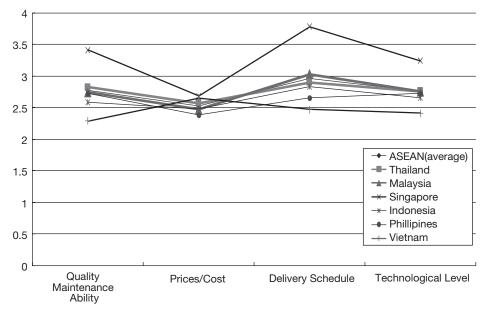


資料2 日系企業による自分たちの従業員への評価

次にお見せしますが、ベトナムの評価と比べて見るこ とがポイントになりますので、ここでは技術レベルの ところで評価がちょっと高い、すなわちベトナムの工 場の技術レベルについては満足度が高いということ が指摘できます。

次に、資料2のグラフは従業員に対する評価を示 したものです。午前中の第1部ではあまり詳しく説明 しませんでしたが、例えば、アドミニストレーター(管

理職)、エンジニア(技術者)レベル、ワークグループの リーダー、従業員のオペレーターレベルと見たとき に、ある意味、期待値に比べる満足度という点で見る とマレーシアの評価が少し低く見えるということか ら、グローバリゼーションの中では競争が激化して現 実はシビアだという話につなげようとしたのですが、 5月のJENESYSのレクチャーの際には、「やっぱり日 本人スタッフからはそんな程度の評価しかもらえな



Source: JETRO(2002)

資料3 日系企業による下請企業への評価

いのか」、すなわち、日本人スタッフはマレーシア人労 働者を劣っていると評価していると非常にネガティ ブな形で捉えた人も実際にいたわけです。

そういう面を考えると、確かにこういう調査結果を 見る場合にはいろいろな要素を考えなければなりま せんが、実際にこのグラフをパっと見た時に日系企業 の人がどう思うかを別としても、ベトナムの場合は、 ワーカーレベルでも期待値に対する満足度という面 から言うと、ある程度応えてくれていると理解できま す。要するに、コストパフォーマンスとしても日本企 業のやり方に対する適応としてもそれなりに満足で きているということでしょう。

そしてマレーシアの評価はこのような形で示され ていることから、東方政策プログラムの卒業生から は、実際に日系企業に勤めて、すごいハードワークで 頑張っても、自分をスタッフとして活用してくれな い、自分の能力を評価してくれない、職階の上にも行 けないなどといった話がいろいろと出てきました。

その中には、だから日系企業を辞めて自分で会社を 興し、留学体験や日系企業での経験を活かした形で現 地の日系企業にも役立ちたいと思っても、日本人や日 系企業は閉鎖的でのなかなかビジネスチャンスにつ ながらない、と語ってくださった方もいれば、女性で 日系企業では自分の能力が十分に評価されず、自分の 未来がなかなか見えず、アメリカ系の企業に移ったと 語ってくれた方もいました。

資料3のグラフは下請けについての評価です。下請 け企業の評価については、ここでもシンガポールにつ いての評価は高いですが、マレーシアについての評価 はそれほど悪くないことも指摘できます。こちらは比 較的わかりやすい図式といえるでしょう。

■ 東方政策の今後を考えるうえで参考にすべき フルブライト・プログラム

そうしますと、ルックイースト(東方)政策プログラ ムでマレーシア人の若者を日本で勉強させる、研修を させる、もしくはマレーシア日本国際工科院(MJIIT) のようにマレーシアで日本型の工学教育を行うこと で人材をどう育成するかということに加えて、どのよ うなことが必要になってくるかということも議論す べきでしょう。

まず、ルックイースト政策における人材育成という 点で同プログラムが果たす、もしくは東方政策が果た す役割は今後もあるはずです。ただし、その際に高度 な人材の育成というマレーシア側の要請にどう応え るか、そしてその人材をどう活かすのかといったシス テムや体制づくり、支援についての見直しと議論も当 然含まれると思います。

MIIITのように現地で英語で教育することも大事 でしょう。それから当初の東方政策プログラムでは文 科系も対象となっていたのですから、理工系だけでは なく社会科学・人文系も含めて考えていく、もしくは そうしたシステムを日本側も作っていくというのは 非常に重要かと思います。

これはマレーシアで開催された6月の東方政策に関 する国際セミナーの際にも議論しましたが、私自身が 思ったのは、日本の戦後においてフルブライト・プロ グラムが果たした役割です。戦争をしたアメリカ合衆 国が、日本の学生や研究者たちに対してフルブライト・ プログラム――占領下はガリオア・プログラムですが、 奨学金を付けて大量にアメリカに招いて研究する機 会を提供するわけです。

そういったプログラムの中で、いわゆる親米家とし てアカデミックだけではなく政治の分野も含めて、名 前をあげたらきりがないですが、いろいろな分野でオ ピニオンリーダーとなるような人たちが育っていく。 両国間の人的交流は外交関係も含めて社会環境も含 めて非常に大きな役割を担っているということがあ りますし、そうした側面は留学や人材育成、もしくは 研修に含まれていると思います。

こうした人材の組織化・ネットワーク化も東方政策 プログラムでも課題となるでしょう。そして日本の成 功のみならず失敗や間違いからも学ぶということが 重要になってきます。

■ 日韓のケースから考える 多様な人的交流の重要性

人的交流は継続することが重要ですし、さまざまな 形で行うことが大切です。東方政策プログラムで奨学 金をつけて日本に留学、研修で来ることを継続してい くことも重要ですし、それだけではなく、両地域の行 き来ということで、(政治のトップレベルの外交面に ついては鈴木絢女さんも指摘していましたけれども) さまざまな多様な形態、多様なルートでの交流を進 め、深めていくことも重要です。

考えていただきたいのが日韓関係です。1980年代 の歴史教科書問題を初めとして、歴史認識問題によっ て二国間の外交関係は常に問題となってきました。最 近も、従軍慰安婦題や竹島(韓国名「独島」)問題で、従 軍慰安婦の像が日本大使館の前に建てられたり、政治 家が竹島に上陸したりといったニュースが次々と報 道されています。

このように、二国間の政治関係は難しい問題をずっ とはらんでいますが、1990年代以降のいわゆる韓流 ブームで、当初は30代以上の女性たちだったのが、現 在では10代、20代の若い女性や男性も含めて、幅広い 層がK-Popを初めとする韓流文化のファンとなって 韓国に親近感を持っています。そうした人たちは、韓 国語を学んで韓国に留学したい、韓国のことを知りた い、日韓関係について戦争のことも含めて勉強してい く、という面では相互交流や歴史理解を深め、人的交 流・文化交流の基盤を作っていくわけです。こうした ケースを考えますと、さまざまな面での交流を考えて いく必要があると思います。

■ 東方政策には、グローバル化時代において 新たに担うべき役割があり得る

最後に提起したいことは、日本とマレーシアの関係 を新しい形で構築していくことの重要性です。最初に 述べたように、1990年代以降、経済のグローバル化は 急激に進行しています。そうした中において、日本と マレーシアの関係もグローバル化の中で新しい関係 を構築していくことが必要です。

すでに21世紀に入って10年あまりが過ぎています。 現在、そしてこれから、日本にとって近隣アジア諸国 との関係や存在はどういった意味をもつのか。もしく は日本にとってASEANの中におけるマレーシアとは 何なのか。この30年間の変化を理解した上で、相互の 関係を新しく作っていくことが大切です。

グローバル経済において、マレーシアは先進国の多 国籍企業に限らず中国などからの投資も増えてきま した。日本もすでに米国との貿易よりも中国との貿易 の方が大きくなっています。アジア通貨・金融危機や リーマンショックなど、グローバル経済の影響もそれ ぞれ大きく受けてきました。だから単に日本、単にマ レーシアではなく、二国間だけを相互に見つめていれ ば済む時代ではないと思います。そうしたことを考え ながら日本とマレーシアとの関係を改めて位置付け ることが第一に重要でしょうし、これからの30年を考 えたときにそれが前提であろうと思います。

「ルックチャイナ」といった指摘もありましたが、マ レーシア側にしてみれば、日本、韓国に加えて新しく ルックイーストという中では当然中国の存在は大き くなると思います。日本側が「ルックマレーシア」と いう視点を持つことも大切でしょう。先ほどアクマル さんからハラルフード・ビジネスの紹介などもありま したが、日本側がイスラーム金融(今日のコメンテー ターの鳥居髙さんもイスラーム金融についての研究 をなさっていますが)なども含めて、マレーシアの ケースから学ぶこともあるでしょう。今後は日本とマ レーシアとの関係もさまざまな側面から考えていく ことが必要です。

そう考えると、東方政策は日本とマレーシアの二国

間の関係強化と相互交流のために重要であることは もちろんですが、グローバル化の時代に新たな役割を 担うことも可能だと思います。東方政策プログラムに よって日本で学んで世界で活躍していくことも可能 です。それによって日本とマレーシアとの双方の信頼 関係がさらに深まるのであったら十分に意味がある ことです。

■ 日本で学び世界で活躍する人材の育成と 日本企業の国際化の遅れへの対応

もし日本の企業に行って能力を評価してもらえな い、人材として十分に活用してもらえないと思った ら、日本語の能力を持ち、日本での留学体験や日本社 会の理解を売り込みながら、そうした国際体験をテコ にアメリカ系企業に就職してもいいし、ヨーロッパに 行ってもいい。アジアのほかの国でもいい。どんな形 でもいいので、グローバルに活躍できるところを選択 して行ってほしい。これは11月の在日マレーシア留学 生会主催のルックイースト政策のシンポジウムでも マレーシア人留学生に強調したことです。

在日マレーシア留学会のシンポ準備実行委員から は、JENESYSの私のレクチャーで誤解されたのでは ないかと懸念した日系企業の評価について、ぜひグ ローバル化の中で状況は非常に厳しいのだとマレー シア人学生に言ってほしいと逆に言われました。です から、そうした中で私が言ったことは、日本に学び世 界で活躍するのでいいのではないか、ぜひ日本留学で 存分に学んで力をつけてグローバル人材に育ってほ しいと伝えました。

他方で、そうしたグローバル人材を十分に活用する ことができるように、日本企業の国際化、経営感覚の グローバル化などの対応も大きな課題になっている ことも日本側は理解しなければならず、日本側での経 済界も含めてグローバル化への対応が遅れているこ とを認識することも非常に重要だと考えています。

司会 吉村さんには東方政策プログラムの課題とこ れからの役割といった観点から、特に日本への留学生 の活躍の場が十分にないのではないかという点を中 心にお話をいただきました。

次は穴沢眞さんです。穴沢さんは小樽商科大学教授 で、マレーシアの日系企業の研究の第一人者です。日 系企業の進出と人材育成という観点からのお話をお 願いします。

報告4

穴沢 眞 小樽商科大学



日系企業の専門家というありがたいご紹介をいた だいたのですが、それだけやっているわけではないと いうことも一言言っておきたいと思います。今日は、 日系企業の進出とか人材育成というテーマをいただ きましたので、そういったことについてご紹介をした いと思っています。

マレーシアが貧しかった分、だいぶ豊かになってき たというお話が午前の部でもありましたが、私が最初 に30年前にマレーシアに行ったとき、私は決してマ レーシアが貧しいと思いませんでした。むしろ、日本 よりも豊かな国なんじゃないかとも思いました。実 際、当時は1リンギが100円の時代でした。私はロータ リークラブの奨学金をもらって、月額6万円、600リン ギで暮らしていました。そのうちの300リンギは寮費 を食事込みで払わされていますから、1日10リンギし か使えず、ある意味非常に貧しい生活をしていました。

これは私が貧しいかどうかという問題ではなく、マ ラヤ大学の大学院の授業に出ていますと、マラヤ大学 の学生は政府からの奨学金として、1.300か1.400リン ギをもらっていました。当時の13、14万円、私の倍も らっていたのです。私は外国人でありながら彼らの半 分以下の奨学金でそこそこ暮らしていたということ もありましたけれども、決して貧しいとは思いません でした。

■ イギリスの植民地支配を破って日本が来た衝撃 ――マハティール元首相の自伝から

私は報告では最初に小ネタを一つずつ入れるよう にしていて、前回のアジア政経学会ではマハティール 首相がてんぷらが好きだとか温泉が好きだとかいっ た話をしました。今日の小ネタは、マハティールさん の自伝が出たのをご存知だと思いますが、そこにルッ クイーストのことを書いた章がありまして、それを ちょっと読んできました。

それによりますと、最初は役所にもほかの閣僚にも ルックイーストを全然理解してもらえなかったと書 いてありました。「何故で日本? ヨーロッパでいい